

支部大会研究発表題目

二〇〇四年秋季大会「10月9日、  
於・佛教大学」

・「漱石『三四郎』の雲の描写を読み解く―なぜ美禰子と野々宮は結婚しなかったのか―」：岸本次子（武庫川女子大学大学院）

・「リアリズムの限界 国民文学論の現実把握について」：内藤由直（立命館大学大学院）

・「紀行文を書き分けるということ―遅塚麗水の南信探勝隊関係紀行文を中心にして―」：熊谷昭宏（同志社大学大学院）

講演  
・『世界遺産文学』の試み」：浅田隆（奈良大学）

二〇〇五年春季大会「6月11日、  
於・近畿大学」

・「河内もの の型―今東光『おんば』を中心に」：中谷元宣（城星学園高等学校）

・「織田作之助の『わが町』について」：宮川康 大阪教育大学付属高等学校 池田校舎

・「大阪の文学と出版文化―雑誌『新文学』（全国書房）研究 出版統制と編集者のやりとりを通じて」：増田周子（関西大学）

・「オンライン版文学事典データベースは可能か」：紅野謙介（日本大学）

支部大会印象記

二〇〇四年度秋季大会印象記

二〇〇四年度の秋季大会は、一月九日、京都の佛教大学で開催された。

当日は台風二二号の襲来が懸念され、警報が発令されれば直ちに中止という条件の下で始められる、異例の展開となった。外には不穏な黒雲が漂う中、会場ではまず、岸本次子氏が「漱石の『三四郎』の雲の描写を読み解く―なぜ美禰子と野々宮は結婚しなかったのか―」を発表された。絹雲・積雲・絹層雲など、美禰子・野々宮・三四郎それぞれが見上げる雲を一般科学書で特定し、漱石が読んだとされるラスキン『近世画家論』を援用して、三人の性格を分析する。野々宮は「すぐれた感性と共に広い人間性を内に持つ男性」、美禰子は「直感的に物を見る女性」。美禰子は野々宮を皮相の部分でしか見られなかったために、結婚へ進めなかった―と

というのが論の骨子であるようだ。ひとつの解釈として成り立つとは思えないが、一面的な理解とも受け取られ、説得力に欠ける感が残った。『三四郎』という作品にとつて、なぜ「美禰子と野々宮は結婚しなかったのか」が大きな問題となるのか、漱石にとつて「雲」とはどのような意義を持つのか、問題意識を明確にして、より具体的に論じる必要があるように思われた。

つづいての発表、内藤由直氏の「リアリズムの限界―国民文学論の現実把握について―」は、一八九〇年代・一九三〇年代・一九五〇年代、三つの国民文学論を「リアリズム批判」「ロマン主義との関係性」「政治性」の観点から整理して、その意義と問題点を炙り出した。そして、現実との能動的な関わりを避け、戦争を受容し参加していった点で、今日、廃棄されるべき理論であるとの論者の立場を明確にされた。近年珍しい主体的な発表であった。しかし、明治期・日中戦争期・太平洋戦争敗戦後という幅のある時期を総括しようとして見えてくるものと隠されるものとを示す必要があったように思う。例えば、国民文学論がロマン主義に近接したのが事実としても、高山樗牛の「ロマンチック文学」と日本浪曼派の「ロマンチズム」を同一に論じるには無理がある。また、国民文学論が論理の運動であり、実作としては現れないことを指摘されたが、もしも事実とすれば、実作を伴わない文学理論にどのような意味があるのか。また、戦後の国民文学論には国語教育をおしての実践運動

が伴っていたが、それをどう位置づけるのか。国民文学論にいろいろ問題があったのは確かだが、簡単に廃棄すべき理論と割り切れるのだろうか。限られた時間内に、早口でたくさんの内容を伝えようとされたために、付いていくのが精一杯。誤解していることも多いと思われる。以上は私の感想に過ぎない。

休憩に入った頃には、台風も逸れて天候は回復。出席者も百名を越え、盛況のうちに大会は進められた。

（田中勲儀）

休憩を挟んで、熊谷昭宏氏の「紀行文を書き分けるということ―遅塚麗水の南信探勝隊関係紀行文を中心として―」と、浅田隆氏の講演「世界遺産文学」の試み」があった。

熊谷氏は、タイトルにもあるように、明治三九年に南信州を探方した麗水が、この探方を素材として執筆した文体の異なる四編の紀行文を取り上げる。「入蘇日記」では、麗水得意の漢文脈の美文調であったものが、「御岳の一夜」では、軽妙洒脱な会話の応酬を挟み込んだ言文一致体となる。こうした「書き分け」が、明治四〇年前後の紀行文をめぐるといふなかで、どのような意味を持つのかについて考察したものである。熊谷氏は、この試みを麗水の「遊戯」だとしつつも、自然主義文学陣営の紀行文論が、「美文が描いてきた風景という対象を後退させるといった転換を行ったに過ぎないことを、逆照射している」と、結論付ける。レジュームにもコメントを付すなど、気配りのある丁寧で分かりやすい発表であった。

漢文書き下しの美文体から、平易な言文一致体へと文文体、進化史観とでもいったものを、相対化しようという意図はくみ取れるし、問題系としては、熊谷氏も引く佐々木基成氏の「紀行文の作り方」(日本近代文学、第64集)と重なるものとも考えられる。ただ、熊谷氏のいう「風景」と佐々木氏のいう「実性や情報性」を置き換えたとき、佐々木論との差異が、もうひとつ明瞭にならなかつたのが惜しまれる。また、細かなことでは、旧派の麗水が必ずしも「排除」されたのではない証拠として提示された「文界十傑得点決定発表」での麗水・第五位という順位も、一位の七〇〇七票、二位の五五一六票という数字と、麗水の二九〇票という数字を比較したとき、そこには圧倒的な落差があり、このデータが逆に熊谷氏の判断に疑問を抱かせる余地を与えているようにも思えた。

最後は、『世界遺産文学』の試み」と題した浅田隆氏の講演で締めくくられた。関西支部では、久しぶりの講演であった。浅田氏の勤務校である奈良大学には、古都・奈良という立地条件を生かして「世界遺産コース」が設けられている。浅田氏は、世界遺産を考えることは我々自身の生き方を考えることだという。配られた資料には、「一、世界遺産について」「二、作品若干」「三、若干の感慨(あるいは「世迷言」)の三つの柱が立てられており、「二」では、奈良に取材した鴫外や子規や堀辰雄の作品に触れていく。

興味深かつたのは、「三」である。浅田氏自身のこれまでの歩みを振り

返りながら穏やかな口調で語られていくのだが、「文学の力を信じたい」との氏の思いが、ひしひしと伝わってくる。教室で「読み方」や「書き方」、あるいは「考え方」は教えてきても、「志」を伝えることに意識的であつたかどうかと、思わず我が身を振り返らざるをえなかつた。浅田氏は所用で出席されなかつたが、場所を移しての懇親会の席上で、会場校をお引き受け下さつた三谷憲正氏も、浅田氏の講演に強い感銘を受けたと語つておられた。心に響くだけでなく、考えさせられる講演でもあつた。

(大会数日前から、刻々と変化する台風情報に対応して細心の準備をされてきた支部長をはじめ、会場校、運営委員の皆様、ほんとうに大変だつたと思います。どうもありがとうございました。)

(越前宏宏)

## 二〇〇五年度春季大会印象記

日本近代文学会関西支部編の『大阪近代文学事典』が和泉書院より刊行されたのを記念して春季大会は「研究としての事典『大阪近代文学事典』刊行を記念して」という特集で、四名の研究発表が行なわれた。

当日はレジュメの他に「毎日新聞」に掲載された浦西和彦編集委員長の『大阪近代文学事典』刊行の記事(二〇〇五年六月三日夕刊)や、書評(同五日)がコピーして配られた。司会の佐藤秀明氏も加わつて、『大阪近代文学事典』をめぐる熱のこもつた発表が繰り広げられた。

前半は、今東光と織田作之助が取り上げられた。まず、中谷元宣氏の「河内もの」の型「今東光『おんば』を中心」は新感覚派から出発した今東光が天台院住職として大阪府八尾市に移住してから、昭和三、四十年代に描いた「河内もの」と呼ばれる作品群について、その代表作の一つである『おんば』を中心に「河内もの」に共通する特徴的な型を提示された。疫病の蔓延、私生児、乳母の描き方など多くの作品や資料を用いてその特徴が考察された。河内と大阪市内の天満との描き分けが谷崎文学の影響を受けながらも今東光独自の意味づけがされ、その文化的差異を描く作者の差別的な方法も指摘された。また「河内もの」に表れた阿倍野・西成界隈は黒岩重吾の西成もの「貧しう犯罪的な悪所のイメージ」が反映され、大阪文学としての「河内もの」が今東光独自の河内観に支えられつつ先行文学、同時代的文学をも包括していると論じられた。質疑応答の中で、今東光は「河内もの」を典型的なパターンで描き、文学的イメージを実際の土地のイメージとして流通させ、言わばマイナスの仕事をしたのではないかという問題に及んだ。郷土の歴史と文学が絡みあつた今東光文学の評価の難しさを今さらに感じさせられた。

次に、宮川康氏の「織田作之助の『わが町』について」は故郷を「架空の町」と呼ぶ織田の大阪に対するスタンスを見た上で、織田にとつて「わが町」とは何だつたのかをテクニクスト成立過程を通して検証された。短編と長編の二種類あるテクニクストについて氏は両作品が並行して描かれ、

短編が出た後で長編に手が加えられたのではないかという見解を示された。溝口健二監督の映画と小説との関係にも触れられた。長編『わが町』には織田の「婚期はづれ」「夫婦善哉」「立志伝」の多くの部分が、また「動物集」「大阪発見」などの一部が、さらに野村愛正「ダバオの父太田恭三郎」、渡邊薫「フィリップス図説」などが取り込まれている状況を「テクニクスト対照表」に拠つて細かく説明された。そして長編のオリジナリティはマニラのベンゲット道路や潜水夫、ブラネタリウムなど昭和十七年当時のフィリピンと日本の関係や時局性にあるとし、織田にとつて「わが町」とはマニラでも大阪でもなく架空の町として大阪を再構築したものであると結論された。発表時間がやや長引いたが、地道なテクニクスト研究の中から織田の大阪観が窺えて興味深かつた。大阪文学の特集が今後も大会で継続して行なわれることを期待している。

会場の近畿大学と前総長故世耕政隆氏夫人のご好意で「太宰治の山岸外史宛書簡」が展示公開され、貴重な資料を見せていただくことが出来たのは望外の幸せだつた。浅野洋氏はじめ関係各位にお礼申し上げたい。(檀原みずす)

後半一人目の増田周子氏は、「大阪の文学と出版文化 雑誌『新文学』(全国書房) 研究出版統制と編集者とのやりとりを通じて」で、大阪で発行された雑誌『新文学』について、総目録を作成し、その関係者の回想録や書簡から創刊の趣旨や戦時下の出版統制などを明らかにされた。『大阪

近代文学事典』では取り上げられなかった大阪の出版文化に関する研究報告であり、今後の大阪文学研究の可能性を大いに期待させるものであったと思つた。

次の紅野謙介氏の「発表は、「オンライン版データベースは可能か」という問題提起に対して、紙媒体の事典の限界を指摘し、オンライン版データベースの効用を説いたものである。書物のかたちでは難しい加筆や修正なども、データベースなら簡単にクリアできる。オンライン版データベースで想定されるコストや管理などの問題点に解決策を示しながら、紅野謙介氏が作成された『大阪近代文学事典』のデータベースを実際に動かしてみせたことで、オンライン版データベースに対するフロアの期待も高まったようだ。質疑応答では、既に公開されている「ネットミュージアム兵庫県文学館」がモデルケースになるといふ意見もあった。

今回の特集「研究としての事典『大阪近代文学事典』刊行を記念して」を通じて、我々関西支部の研究者は、今後の大阪文学研究の可能性を再認識すると同時に、新たな課題を突きつけられた気がする。

(荒井真理亜)

## 研究会紹介

主に関西で行われている研究会について、以下の項目順で紹介しします。(順不同)

### 会の名称

代表者または事務局等、連絡先の氏名・住所・電話番号  
会希望者のための入会案内  
その他注意事項

芥川龍之介研究会

ホームページ URL

[http://www.geocities.jp/bookend\\_ryunosuke5569/](http://www.geocities.jp/bookend_ryunosuke5569/)

連絡先 e-mail アドレス

choko\_dou@yahoo.co.jp

本会は、一九九八年、出身・所属大学の枠を超えて、芥川龍之介とその文学について研究すべく、関西在住の院生・研究生・大学教員を中心に発足されました。現在の例会参加者数は、十〜十五名ほどです。芥川以外の近代作家や、さらに外国文学・比較文学を専門とする方も来て下さっています。年二回(大学の春休みと夏休み)土曜日に大阪市内で、例会「研究発表会」を開催しています。「例会」は大阪で開いています。関西以外からも参加されています。そのため、発足当初から数年間は「例会」を春夏秋冬の年四回開き、三年ほど前からは回数を年二回に減らし春と秋に開催していましたが、地方の大学教員の方も参加しやすいように、年二回開催はそのまま、春休み(二月か三月)と夏休み(七月下旬から九月上旬)の開催に変更し

ました。また、参加者の専門や研究対象の多様化をふまえ、発足主旨の「芥川龍之介とその文学について」も、三年ほど前から「芥川龍之介とその文学を中心とした日本の近現代文学について」とあまり、芥川にこだわらない方向に変更しています。なお、現在、「会費」「会場費」の類は頂いておりません。ただ、遠方からご参加いただく場合、交通費は各自でご負担下さるようお願いいたします。最後になりましたが、当会では「入会(参加)資格」などは設けておりません。「愛好会」ではなく「研究会」である事をご理解いただければ、基本的にどなたでもご参加いただけます。例会参加希望の方は、事務局宛に e-mail か往復葉書で連絡下さい。追って「例会案内」を送付させていただきます。

これまでの「発表題目・発表者・会場等」については、当会のホームページ、「國文学」「学界教育界の動向」「文学・語学」「彙報」「いずみ通信」を催し「研究会・同人誌などのご案内」欄を参照下さい。メールアドレスをお教え頂ければ e-mail で年二回の「例会案内」を送らせて頂きます。なお、当会では、経費を抑えるため郵便による例会案内葉書は送っておりません。

### 近代部会

鳥井正晴 相愛大学人文学部 日本文化学科合同研究室 鳥井正晴

〒559-0033 大阪市住之江区南港中4-4-1 06-6612-5900(代)

漱石の作品を、章を追って丹念に読んでいく輪読会です。

### 漱石詩を読む会

田中邦夫 大阪経済大学人間科学部 田中邦夫研究室 田中邦夫

〒553-8533 大阪市東淀川区大隅2-2-18 06-6398-2431(代)

漱石の「漢詩」を、逐一に読む研究会です。

### 文学論を読む会

鳥井正晴 相愛大学人文学部 日本文化学科合同研究室 鳥井正晴

〒559-0033 大阪市住之江区南港中4-4-1 06-6612-5900(代)

現在、パフチンを輪読中です。

### 三重近代文学研究会

半田美永 皇學館大学文学部 半田研究室 0596-22-6410

### 横光利一を読む会

(特に代表者は決まっていなが、連絡先として) 杣谷英紀 somatanih@yhb.ne.jp

入会には somatanih@yhb.ne.jp まで連絡ください。案内を差し上げます。

年2回の研究例会を設けています。年会費は連絡のための実費のみいただいております。お気軽に参加ください。

# 会員の業績

凡例

著書名…『』  
論文名…「」  
掲載誌紙名…『』  
注記等…( )

各業績に付した番号のうち、は単行本、は雑誌収録論文、はその他(研究ノート・書評・口頭発表・項目執筆等)を示す。なお、は書名・出版社・発行年月の順、は論文タイトル・掲載誌・発行年月の順で記した。

掲載誌紙の巻号数は省略し、原則として雑誌は発行月のみ、新聞は発行月日を記した。

原則として雑誌の編者名・発行書名は等は会員の届出に記載のあるもののみ記した。

著書名・論文名・掲載誌紙名の用字は、原則として会員届出の記載に拠っている。

## ア行の部

赤瀬雅子  
「演劇の街を行く」『多羅』〇四年四月  
「パリのヨーガ」鈴木淳子の作品を読む『多羅』〇四年八月  
「執筆ノート」『日本近代文学』〇四年十月  
「プラハとカフカ」『多羅』〇四年十二月

乾口達司

編著『日本近代文学との戦い 後

藤明生遺稿集』柳原出版、〇四年四月

書評「後藤明生と『日本近代文学との戦い』」『中國新聞』〇四年七月六日

書評「逸脱と解体 後藤明生『日本近代文学との戦い』の刊行に寄せて」『スペースXX通信』〇四年八月

研究ノート「執筆ノート 後藤明生著ノ乾口達司編『日本近代文学との戦い 後藤明生遺稿集』」『日本近代文学』〇四年十月

書評「後藤明生著『日本近代文学との戦い 後藤明生遺稿集』」月刊『国語教育』〇四年十一月

岩見幸恵

「松本清張書誌研究文献目録」勉誠出版、〇四年十月

太田登

「啄木詩歌のイメージの特質」『論集石川啄木』おうふう、〇四年四月

大橋毅彦

共著『上海中日文化協会研究・序説』(資料集、非売品)〇四年三月

「民族の夢の坩堝としての劇場空間」『蘭心大戲院4051』『アジア遊学』〇四年四月

随想「上海の提籃橋からダツハウヘーD・L・プロツホの航跡を追いかけて」『千年紀文学』〇四年七月

口頭発表「混沌としての蘭心・プロツホという発光体」阿部知二研究会平成十六年度秋季研究大会(講演)〇四年十一月

研究展望「シャンハイされた男の弁」『昭和文学研究』〇五年三月

口頭発表「複数形の上海」広東外語外貿大学国際シンポジウム「全球地域下語境下東亜文学研究的新課題」新方法、〇五年三月

岡崎昌宏

「辻邦生『サラマンカの手帖から』論」『解釈』〇四年八月

## 力行の部

川端俊英

「文学者が証言する天災の中の人災 関東大震災八〇周年に当たって」『部落問題研究』〇四年四月

北川扶生子

「明治の紀行文 遅塚麗水」不二の高根を中心に」鳥取大学教育地域科学部紀要(教育・人文科学)〇三年一月

口頭発表「Representations of Women in Early Works of Natsume Soseki: Style and the Reorganization of Literary Genres in Japan」Japan Research Centre Seminars, SOAS, University of London. 〇三年五月

口頭発表「トラウマとしての異文化体験 夏目漱石のロンドン留学と英文学研究」大阪市立大学都市文化センター、〇三年九月

書評「作家漱石のスリリングな舞台裏 飛ヶ谷美穂子著『漱石の源泉 創造への階段』」小森陽一・石原千秋編『漱石研究』〇三年十月

「エスニック・マイノリティのロンドン 夏目漱石のヴィクトリア朝

絵画受容と社会進化論」大阪市立大学文学研究科叢書編集委員会編『都市の異文化交流』(清文堂)〇四年三

月

研究ノート「Letter from Japan」, Newsletter of Japan Research Centre, Japan Research Centre, SOAS, University of London. 〇四年四月

口頭発表「夏目漱石『文学評論』における分裂と可能性 ポープ研究と明治期の文章観」日本比較文学学会全国大会、〇四年六月

「失われゆく避難所(アジール)の門」における女・植民地・文体」小森陽一・石原千秋編『漱石研究』〇四年十一月

木田隆文

「通俗の力」『牡丹と薔薇』雑考」『京都学園中学高校論集』〇四年十一月

「新聞を語る人々」武田泰淳「情婦殺し」の言説空間」『国文学論叢』〇五年二月

北野昭彦

「開高健『流亡記』のもう一つの寓話 脱定住社会」蘇生への賭け」『龍谷大学論集』〇四年七月

「金石範『虚夢譚』の私」と朝鮮育ちの日本人F 在日朝鮮人私的在日性を照らすもう一つの装置」『論究日本文学』〇五年二月

工藤哲夫

「土神と狐の物語 那珂(中勘助)『提婆達多』からの影響」『女子大國文』〇四年十二月

國中治

「小山正孝における立原道造と詩と小説」小山正孝。詩人薄命」潮流

社、〇四年十二月  
「戦争詩への道」「屋上の鶏」から見た三好達治」神戶松蔭女子学院大学・短期大学研究紀要」〇五年三月

熊谷昭宏

「飛行と 未来 の日露戦争 東海散士」「日露戦争羽川六郎」を中心に  
「同志社国文学」〇四年十一月  
「伊井直行」「江上剛」「幸田真音」「藤沢清造」「穂積鷲」「三島章道」「若杉慧」「渡辺黙禅」「浅井清」「佐藤勝編」「日本現代小説大事典」明治書院、  
〇四年七月

口頭発表「紀行文を書き分けるということ 遅塚麗水の南信探勝隊関係紀行文を中心に」「日本近代文学会関西支部秋季大会（仏教大学）」〇四年十月

倉西聡

「満洲移民事業と伊藤整 マイノリティとしての立場からの転換」  
『武庫川国文』〇五年三月

小林幹也

「題材の隠蔽術 太宰治『駈込み訴へ』論」近畿大学日本語日本文学」  
〇五年三月

「新居」『文藝家協会ニュース』〇四年五月

「時評50/50（短歌時評）」『玲瓏』  
〇四年五月～〇五年二月

「あはきげがれを（岡井隆歌集）伊太利亜」書評」『玲瓏』〇四年九月

「玲瓏二十周年に向けて」水葬物語」それ以前（塚本邦雄作品 座談会）  
「玲瓏」〇四年九月～〇五年二月

「諧謔の歌一首鑑賞（江戸雪歌集『百合オイル』より）」『歌壇』〇四年十一月  
「書評（晋樹隆彦歌集『秘鑰』）」『玲瓏』〇五年二月

### サ行の部

真銅正宏

「お化け・音曲・火の現前」『文学』  
〇四年七月

「舞姫」と「新浦島」異界との往還」『森鷗外研究』〇四年九月

「音の芸を書くということ」『地唄』から「一の糸へ」井上謙・半田美永・宮内淳子編『有吉佐和子の世界』翰林書房、〇四年十月

「乃木希典における文学 日露戦争および漢詩というジャンル」『同志社国文学』〇四年十一月

「言葉の異国 永井荷風における訳詩と西洋」『國學院雑誌』〇四年十一月

「ビールの魅力 味と言葉について」『同志社国文学』〇四年三月

「解説『慶安太平記後日譚』の世界」(落合三郎『慶安太平記後日譚』)  
『新・プロレタリア文学精選集11』ゆまに書房、〇四年六月

「幸田文」おとつと」「黒い裾」「闘」  
「流れる」『条野探菊』『廓雀小稲出来秋』『日本現代小説大事典』明治書院、〇四年七月

口頭発表「『大衆』はリアリティーを欲している 清張推理小説の淵源」  
「松本清張研究会（愛知大学）」  
〇四年十二月

須田千里

編著『新編泉鏡花集 第七巻 伊勢

名古屋 岩波書店、〇四年五月  
「『大力』論」『太宰治研究』〇四年六月  
「草双紙としての『風流線』」『文学』〇四年七月

### 夕行の部

高松敏男

「わが国最初のチエーホフ文献と初期受容 角田浩々歌客の先駆的仕事を中心に」『翻訳と歴史 文学・社会・書誌』〇四年十一月

塚田満江  
「小説主人公の造型 その六 五度『続胡砂吹く風』に寄せて」『日本文学風土学会 記事』〇四年六月

随筆（筆名・黒田しのぶ）「あの先生はいま 続、目玉入替えの記」『洛味』  
〇四年五月

随筆（筆名・黒田しのぶ）「北鮮、北満、北陸の冬」『洛味』  
〇五年二月

東口昌央  
「ナショナル なものの誘惑 高橋和巳論」『昭和文学研究』  
〇四年九月

外村彰  
共編著『井上多喜三郎全集』同全集刊行会、〇四年十月

「岡本かの子初期童話の構想」『秀子の人形』「テスの話」遡及」『立命館文学』  
〇四年十月

「岡本かの子、東海道五十三次」  
「時代」の隠喩を視座として」  
『昭和文学研究』  
〇五年三月

註釈「さへづり（対話）」瀧本和成編『森鷗外 現代小品集』晃洋書

房、〇四年五月  
註釈・解説「維新後婦人に対する観念の変遷」石橋湛山」上田博編  
「明治の結婚小説」おふう、  
〇四年九月

### ナ行の部

口頭発表

「湖東出身の近代文学者 安土、五個荘を中心に」滋賀県教育研究会数学部会（講演）  
〇四年六月

口頭発表「高橋輝雄の戦争詩」  
日本文学協会（仏教大学）  
〇四年七月

口頭発表「井上多喜三郎と近江の詩人たち」日本現代詩人会西日本ゼミナール（講演）  
〇五年一月

友田義行  
「映画の体験とリアリズム 黒澤明「どですかでん」ノ山本周五郎「季節のない街」論」『論究日本文学』  
〇五年二月

鳥井正晴  
「漱石俳句撰」句あるべくも3」  
鎌倉漱石の会・会報『門』  
〇四年九月

「漱石俳句撰」句あるべくも4」  
鎌倉漱石の会・会報『門』  
〇五年三月

永井敦子  
「探偵小説の中の 監視権力」  
谷崎潤一郎『途上』における探偵と被疑者」『日本近代文学』  
〇四年十月

新刊紹介「三島佑一著『谷崎潤一郎と大阪』」国文学解釈と鑑賞」  
〇四年十月

永宋啓伸  
共著『谷崎潤一郎書誌研究文献目録』勉誠出版、〇四年十月

生井知子

「武者小路実篤論 意識・言葉・理屈と無意識・身体・心」『同志社女子大学 学術研究年報』〇四年十二月

中村美子

「『文学』の価値 『消費』の観点から」『国文論叢』（京都女子大学大学院文学研究科研究紀要）〇五年三月

西川貴子

「呼び寄せられた作家『池谷信三郎』 池谷信三郎賞設立にみる昭和十年前後の『文学』状況」『近代文学合同研究会論集』〇四年十月

「煩悶、格闘 する『詩人』たち 日露戦争前後の『詩』及び『詩人』の考察」『同志社国文学』〇四年十一月

「『詩』という場（トポス） 『天うつつ浪』 試論」『文学』〇五年一、二月

「置き去りにされた 身体 『風流』の世界」『同志社国文学』〇五年三月

西村将洋

「小林秀雄の破片 本多秋五と戦前戦後の持続性」共著『本多秋五の文芸批評 芸術・歴史・人間』菁柿堂、〇四年十一月

編著『コレクシヨン・モダン都市文化 第五巻 モダン都市景観』ゆ

まに書房、〇四年十二月

「大連の詩人たち 詩誌『亞』と地政学」『同志社国文学』〇四年十一月

「桜井忠温『肉弾』 『水野広徳』此一戦」『横山美智子『緑の地平線』」

「松本健一『エンジン・ヘル・ヘアー』」  
「真鍋呉夫『飛ぶ男』」  
「光岡明『機雷』」  
「成田憲彦『官邸』」  
「水木楊『2003年の『痛み』』」  
「浅井清・佐藤勝編『現代小説大事典』 明治書院、〇四年七月

「書評 紅野謙介著『投機としての文学』」  
「昭和文学研究」〇四年九月  
口頭発表『浪漫派の小説『ゴルフ』 雑誌『日本浪漫派』 創刊前夜」  
「日本近代文学会秋季大会（奈良大学）二〇〇四年一〇月

### 八行の部

半田美永

共編著『有吉佐和子の世界』翰林書房、〇四年十月  
「文人たちの紀伊半島 近代文学の余波と創造」『学校法人皇學館出版部』〇五年三月  
「近代文学と熊野学試論」『解釈』〇四年八月

口頭発表『佐藤春夫の風流観』三重近代文学研究会、〇四年七月

細江光

「谷崎潤一郎 深層のレトリック」『和泉書院』〇四年四月  
「南木芳太郎と谷崎潤一郎 山村舞を中心に」『大阪の歴史』〇四年八月

「上山草人年譜稿（五） 谷崎潤一郎との交友を中心に」『甲南女子大

学文学部研究紀要』〇五年三月  
「資料紹介 谷崎活版所・点灯社をめぐる考証、その他」『甲南国文』〇五年三月

### マ行の部

横山朋子

「桐山襲と道浦母都子 『全共闘』の時代を読む」『同志社国文学』〇四年十一月

箕野聡子

「菊池寛 忠直卿行状記」研究近世 武士道 と近代国家思想』神戸海星女子学院大学研究紀要』〇五年三月

水川布美子

「川端康成『雪國』 初期構想をめぐって」『神女大國文』〇五年三月

### ヤ行の部

山本洋

「考証研究 近現代文学」日本図書センター、〇四年十一月

吉岡由紀彦

「『羅生門』 研究史（3） 三好行雄の『人間悪』『存在悪』（3）」『SOLITUDE』〇四年四月  
「テクスト論 以降の現在、作品論 以前に遡行しない形で 作者をどう扱うか』 批評理論研究』〇四年五月

「ミハイル・パフチンの 作者概念・通覧 一九二〇年代〜七〇年代」『同前  
「カルチユラル・スタディーズの

得失 メタ・コメンタリー の観点から」『GENOVER』〇五年三月  
口頭発表『蜜柑』考』芥川龍之介研究会六月例会 〇四年六月  
口頭発表『芥川龍之介』蜜柑』試論』阪神近代文学会夏季大会 〇四年七月

口頭発表『パフチンの 作者概念について』大阪国文談話会文学論を読む例会 〇五年二月十三日  
書評『読書案内 神田由美子著』芥川龍之介の江戸・東京』双文社出版』月刊国語教育』〇五年二月

### ワ行の部

渡邊浩史

「伝統と道具 『白痴群』 創刊号発表詩篇という中也のマニフェスト』『中原中也研究』〇四年八月

渡邊ルリ

「野上弥生子『先生』への手紙」共著『女の手紙』双文社出版、〇四年七月  
「出雲・京都 『出雲の阿国』』有吉佐和子の世界』翰林書房、〇四年十月

### 関西支部ホームページ

<http://www.5c.biglobe.ne.jp/~kindai>

### 関西支部メールアドレス

[kansaihibu@mri.biglobe.ne.jp](mailto:kansaihibu@mri.biglobe.ne.jp)

